

Title	J・ポラード、H・リード著、藤井留美訳『アレクサンドリアの興亡』主婦の友社、二〇〇九
Sub Title	Justin Pollard and Howard Reid, The Rise and Fall of Alexandria : Birthplace of the Modern Mind, London, 2006
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	2009
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.78, No.3 (2009. 10) ,p.149(377)- 154(382)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20091000-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

J・ポラード、H・リード著、藤井留美訳
『アレクサンドリアの興亡』主婦の友社、二〇〇九

小川英雄

(一)

地中海アジアのヘレニズム・ローマ時代には、都市文化が栄え、キリスト教もそれを背景として生まれ発展した。私は二十五年前に、G・ダウニー著『地中海都市の興亡―アンテオキア千年の歴史』(新潮選書、一九八六)という訳書を刊行していただいたが、その訳者あとがきの中で、当時はまだこれらの諸都市の歴史に関する和書が乏しいことを指摘した(二八五頁)。そのような状態には最近に至って変化がみられる。

まず、これらの都市の起源となったアレクサンドロス大王については、森谷公俊著『アレクサンドロス大王―世界征服者の虚像と実像』(講談社選書メチエ、二〇

〇〇)及び同『アレクサンドロスの征服と神話(興亡の世界史8)』(講談社、二〇〇七)が挙げられよう(欧文では、Heckel, W. and L. W. Tritle, *Alexander the Great: A New History*, Blackwell, 2009が最も新しい)。更に、P・プティ、A・ラロンド著、北野徹訳『ヘレニズム文明―地中海都市の歴史と文化』(文庫クセジュ、白水社、二〇〇八)(アレクサンドリアについては第二章)が重要である。又、展覧会のカタログであるが、有名なヘレニズム都市の一つであるペルガモンについて、『ペルガモンとシルクロード―発掘者カール・フーマンと平山郁夫のまなざし』(中近東文化センター付属博物館、二〇〇八)によって知ることができる。

アレクサンドロス大王は自分の名前にちなむ都市アレ

クサンドリアを広大な帝国の中に幾つも建設しようとした。例えば、中央アジアのアルペラはそのような起源を持つ都市であるが、現在まで最初の名前と共に生き残っているのは、エジプトのナイル川河口にあるアレクサンドリアだけである。

上記のダウニーの本の訳者あとがきで、私は邦語のアレクサンドリア史の本がないことを指摘し(拙稿、史学三七—三、一九六四、一二二頁参照)、英書 M. P. Frazer, *Alexandria*, 3 vols., Cambridge University Press, 1975 を代表的なアレクサンドリア史として挙げておいた。その後、K. Michalowski, *Alexandria*, Wien, 1976 と、W. La Riche, *Alexandria: the Sunken City*, London, 1996 などが刊行されている。最後の本の副題に見られるように、古代のアレクサンドリア市街の重要な部分が海中に没しているのであるが、海洋考古学が盛んになるにつれて、最近に至って重要な遺構や遺物が発見されている。その成果は、本年六月二七日から九月二三日まで開催された「海のエジプト展—海底からよみがえる、古代都市アレクサンドリアの至宝」(横浜開港一五〇周年記念開国博 Y 一五〇共催イベント、パシフィコ横浜) に見ることができた。この展覧会に関する朝日新聞(二〇〇九年六月

六日朝刊、三四頁)の記事は、現地で発掘を指揮してきたフランク・ゴディオ氏の談話であり、幾枚もの美事な写真と共に、大いに参考になる。

今回刊行された『アレクサンドリアの興亡』はこのような「海のエジプト展」とほぼ軌を一にするものであり、日本人の古代アレクサンドリアについての知識を大いに広げるものと思われる。このことは、本書の副題(「現代社会の知と科学技術はここから始まった」)が示す通り、現代文明の起源について多くのことを教えてくれる。

本書は四六八頁からなる大冊であるが、図版や索引がないのは欠点である。二つのはしがきとエピローグの他に、全一九章から成る。第一章から第十一章までは、アレクサンドロス大王に始まって、クレオパトラの死(前三〇年)に至るプトレマイオス王朝時代を扱い、第十二章から第十九章までは、ローマ領化したこの都市がやがてキリスト教化し、イスラムによる征服に至るまでを描いている。

(一)

本書にははしがきに相当する部分が二つ付けられている。まず、「序文」では古代文明の一大中心地アレクサ

ンドリアから文化遺産がいかにして西洋に伝えられたかを、プトレマイオスの『地理書』を例にとつて、その伝承ルートを述べる。次に、「はじめに」ではこの都市の主要な学者たちの業績や文化施設（博物館や図書館）を概観する。

第一章は前三三一年、アレクサンドロスのエジプト到来から彼の名前をいただく新都市の建設開始に至る事情を述べ、彼の母国マケドニアやそこからエジプトまでの地中海アジアの征服地の歴史的背景を述べる。

第二章では、バビロンでの大王の死からその武将の一人プトレマイオスのエジプト支配、アレクサンドリアにおける王朝設立までが記される。港湾都市としてのアレクサンドリアの意義が強調される。

第三章では、最古の文明発祥の地エジプトの宗教的、政治的伝統と新しく入って来たギリシア文化との関係が扱われる。プトレマイオス一世のファラオ化やギリシア化したエジプト宗教の新しい神セラピスの出現などである。

第四章はアレクサンドロス大王とプトレマイオス一世との共通の師アリストテレスを通じてのギリシア文化的背景の存続を考察する。それはこの新しい都市の町並み、

政体から学問体系や学校、とりわけ博物館（ムセイオン）や図書館の研究活動などほとんどすべての面から見られる。とりわけ、アリストテレスの影響は大きかった。

第五章は続いて、アレクサンドリアが哲学者や詩人など文化人たちを積極的に保護、支援したことを明らかにする。とりわけ、プトレマイオス一世の家臣デメトリオスやアリストテレスの弟子テオフラストスなどが宮殿を中心に活動した。幾何学者エウクレイデス、ヘロフィデスやエラシストラトスなどの医学者も有名であった。また、この都市には多くのユダヤ人が流れ込み、彼らの聖書のギリシア語訳がプトレマイオス二世の時代にここで完成した。

第六章では、この都市を首都とするプトレマイオス王朝の王権と政策が扱われる。二世を中心として、計画経済が営まれ、貿易が盛んに行われるようになった。海上交通のために、沖合のファロス島に大灯台が築かれた。他方、伝統的宗教建築も止むことなく、王達は兄妹婚を始めるに至った。

第七章では、三世のロードス島の巨大神像の復興支援が指摘される他、この都市の天文学者たちの活動が述べられる。ミレトスのタレスの伝統に立つ、サモス島出身

のアリスタルコスやピュタゴラスが出て、天動説が唱えられた。

第八章では、アレクサンドリアの図書館長まで勤め、天文学は勿論のこと、数学、地理学、歴史、哲学などにも通じ、詩作などの芸術活動も行ったエラトステネスを中心とする。彼は歴史上最も偉大な博識家であり、天文学ではコペルニクスの先駆者であった。

第九章は、シチリア島のシラクサ生まれの数学者、発明家アルキメデスの活動を中心とする。彼は後に生まれ故郷のシラクサに帰り、対ローマ戦役に加わったが敗死した。

第一〇章は四世の時代を描く。王の部下ソスピオスが軍事、外交で活躍した。彼は強力なエジプト人部隊を率いて、前二一七年にラフィアの戦いに勝ち、セレウコス朝のアンティオコス三世を破った。しかし、やがて四世に対する叛乱が続き、アレクサンドリアも混乱した。この時代を代表する文人はキュレネのカリマコスとその弟子アポロニオスであった。前者は図書館の蔵書目録を編集し、後者は詩人として『アルゴナウティカ』を書いた。

第十一章によれば、プトレマイオス朝の最後のヒロインであるクレオパトラの頃、西方のローマはカルタゴの

次の征服対象としてアレクサンドリアを狙っていた。カエサル、ポンペイウスなどの英雄たちが次々にアレクサンドリアを訪れた。そして、前三〇年に女王が死ぬと、オクタウィアヌス(後のアウグストゥス)がこの都市に来て、ローマのエジプト支配が成立した。

(二)

第二章以下ではローマ時代のアレクサンドリアがテーマとなる。ローマ人にとっても、この都市は第一に小麦の輸出港であり、第二に博物館や図書館を拠点とする知的活動の中心地であった。当時の代表的学者はヘロンであり、彼を中心にして古代世界で最初の機械工学が確立し、多くの精密な装置が開発された。近代文明の先駆である。

第三章は紀元前後のアレクサンドリアをテーマとする。この都市生まれのユダヤ人学者フィロンが活躍したのはこの頃である。彼はギリシア哲学にもユダヤ人の聖書にも通じていて、キリスト教出現の背景となる新しい宗教運動に言及した(フィロンについての最新書は、B. Decharneux et al., eds., *Philon d'Alexandrie : un penseur à l'intersection des cultures gréco-romaine, orientale, juive*

at chrétienne, Brepols, 2009 である)。もう一人の知的巨人はクラウディオス・プトレマイオスである。彼はエラトステネスの伝統に立って、哲学、地理学、天文学、数学、芸術に通じていた。天動説を述べた彼の著書『アルmagest』は後世に大きな影響を与えた。

第十四章以後は、二世紀からのキリスト教時代となる。この宗教はここでは下層民の間から急速に広がり、やがて神学校が設けられるに至った。その指導者はパンタイノスやクレメンスであった。それに対して在来の宗教の立場からケルソスが批判的著述をした。

第十五章はローマ帝国に蛮族の侵入が始まった二世紀後半のアレクサンドリア文化を扱う。蛮族と戦った哲人皇帝マルクス・アウレリウスもこの都市を訪れた。北方の国境から遠かったこの都市では、医学、天文学、錬金術が発展した。ペルガモン出身の医師ガレノスはここで解剖学を始めた。但し、中国ではこれより少し早く人体解剖が行なわれていた（三浦於菟、『ここごとと体に効く漢方学』新潮選書、二〇〇五、八八頁参照）。

第十六章は三世紀の混乱時代を扱う。暴君カラカラは二一五年から翌年にかけてここに来て、セラピス神殿にも立ち入ったが、無謀な弾圧政策を実施し、多くの市民

や市長を殺害した。しかし、アレクサンドリアの文化的伝統には根強いものがあり、フィロンの流れの中からアンモニオス・サッカスが現れ、新しい学園を開いた。そこから哲学者プロティノスやオリゲネスが育った。後者はクレメンスのキリスト教学園を再興したばかりでなく、ケルソスに対する論駁書を書いた。又、バビロニア生まれのディオファントスも活躍し、後世に「代数学の父」と呼ばれた。

第十七章は、三二五年のニカエア公会議を中心に展開したキリスト教三位一体論の論争が始まる。当初はアレクサンドリアの教会では異端派のアリウスに人気があったが、やがて正統派のアタナシオスがこの総主教となった。当時のアレクサンドリアではキリスト教の教会や教理学校が強力であったが、ユダヤ教のシナゴグの他、昔からの博物館と図書館も存続していた。そのような状態の中で、三一九年にテオドシウス帝の異教禁止令が發布され、アレクサンドリアでは市街戦の末に、セラピス神殿が破壊された。

第十八章では、この都市の伝統的学問の中心であった哲学者、数学者テオンとその娘ヒュパティアを中心として展開する。テオンは博物館を拠点とする最後の学者で

あったが、娘は独身で博識の天文学者、哲学者、数学者であった。彼女は自宅や自分で開いた学園で、哲学を教えていた。生徒の中にはキリスト教徒もいた。ところが、この都市のキリスト教徒たちの多くが、総主教キュリロス以下過激派となり、教会内の反対派とユダヤ人に対して武装闘争をした。ヒュパティアはこの最中に総主教とその手下のキリスト教徒によって虐殺された。

第十九章では、このような状況の中での、博物館や図書館の消滅、キリスト教会のコプト語採用を描く。そして、遂に六四六年に第三代カリフの時代に、イスラムのアムル將軍が入城して、古代都市アレクサンドリアは終末を迎えた。

エピローグでは、一二九四年になって修道士マクシムス・プラスヌスによってプトレマイオスの『地理書』が再発見され、それがやがてコロンブスの新大陸発見を導いたことを指摘する。

(四)

本書はこのように、古代都市アレクサンドリアの出現から終焉までの歴史と文化を述べたものである。その中で、地中海アジアの一都市が近現代を含めてその後の西

洋史上で重要な役割を演じていたことが明らかになった。特に、文化や学術の分野でこの都市は大きな貢献をした。訳文は概して明快である。

次に、誤植、誤記の若干を指摘しておきたい。九頁二一―六行目に、ストラボンがコンスタンティノポリスを訪れ、「全世界の商業の中心地」と驚嘆した、となっているが、ストラボンの生きていた当時、コンスタンティノポリスは存在していなかった。三七頁一行目のバビロニアはバビロンでなくては入城という言葉が成り立たない。同頁終わりから二行目のバビロニアも一考を要する。二九九頁一〇行目のリディアはリュディア、終りから二行目のダレイウスはダレイオス、終行のバビロニアはバビロンでなくてはならない。三九三頁終りから二行目のデイファントスはデイオフアントスであろう。

なお、本書の原本は Justin Pollard and Howard Reid, *The Rise and Fall of Alexandria: Birthplace of the Modern Mind*, London, 2006 である。

(付記) 本書でも地中海都市のヘレニズム文明とイスラム文明の関係については無視されているが、それについては上記ダウニーの本に対する坂本勉氏の記述(「オリエント」三〇―一、一九八七、九六頁以下)を参照。